

第2分科会記録

司会・島津) 上山大会の開催に当たり、何をテーマにするかを考えたとき、私は沢庵はどうかと提案した。羽州街道のからみで上山で全国的な人というと、沢庵禅師と名族土岐家だと思う。沢庵と土岐は上山にとってすばらしい財産だと思うが、これまで上山では、沢庵をあまり取り上げてこなかったようだ。このたび、お城の前に沢庵と土岐頼行のレリーフができたが、これを機会に上山に何かを残せたらなと思う。

この分科会では、最初に沢庵禅師について話してもらい、次に土岐頼行あるいは土岐家について、最後に沢庵を地域にどう活かしていくかについてお話してもらいたいと思う。

鈴木・上山城学芸員) 我々郷土史を学ぶ者にとって、沢庵を学ぶことは楽しい歴史の勉強ができる。沢庵の周囲にはキラ星のごとく歴史上のスターが登場する。本田政重と沢庵は関係が深く、我々にとって知っておくべき重要なことだと思う。また、沢庵が家光をじらしていく過程などをみると、したたかさを持った、自分の無罪を貫く信念を通す人だと思う。この辺のところを裏付けられれば良いなと考えている。

三春・土岐会事務局長) 沢庵 56 歳、頼行 21 歳。青年藩主の頼行にとって、沢庵が流されてきたのは千載一遇のチャンスであったと思う。なぜ上山に流されてきたかを前から考えてきたが、自分なりの結論としては、入封された直後であったこと、小藩であったこと、青年藩主だったことが考えられる。

頼行は沢庵の教えを忠実に守って藩政を敷いたようだ。沢庵は、頼行に対し、上中下三字説で藩政を築くことや政治と宗教のあり方などを教えたと思う。そういうことから頼行は、仏教は派閥でなく一本なんだという考えで寺を大事にしたと思われる。また、築庭についても学んだしており、小さな庭にも宇宙があることを学んだ。

こういふことで、沢庵の教えよって頼行は名君になったということであろう。

木村・文化財審議会会長) 今年大徳寺に行って庭園を見てきた。上山の人は、月岡公園に本丸庭園があるのは知っていると思うが、漠然と石が並んでいるくらいにしかわからないと思う。

大徳寺に行ってるほどと思ったのは、沢庵は、大徳寺の大仙院の枯山水のミニ公園を作って頼行公に送ったのではないかということである。頼行公に精神修養の場として、悟りを開けるように作ったのではないかとつくづく感じてきた。

庭は、天地、自然の縮図、万物の写し。庭は、心に英気を養うものであり、無心の心をわが心として学ぶことを教えたのだと思う。栗川神社の近くに壮大な庭園を作って領民にも楽しんでもらう、領民にも開放したと記録されているが、これは都市公園の始まりといえるであろう。

島津) 次に天下の名族、土岐頼行と土岐家についてお話をしていただく。

三春) 土岐家は、摂津源氏から美濃源氏の流れ、明智土岐の流れをくんでいる。上山の殿様の中興の祖が定政公である。土岐家は、最後は受難の時を迎え、沼田で明治維新を迎えた。ペリーが来航した時に、下田に奉行として派遣されて交渉にあたったのが縁になり沼田市と下田市は

現在姉妹都市になっている。

木村) 土岐家は、名門中の名門であった。寺社の再興に尽力、衰退した寺社にテコ入れをした。領民の心をつかむことがうまく、しかるべき所に城の代わりになる寺を配置したり、領民の信仰心の厚さをつかむことをした。宮脇の八幡神社を鎮守の神として整備し、神輿の渡御行列も土岐さんが始めた。領民の心をつかんで、まつりごとを潤沢にしたよいうことである。

鈴木) 土岐家の遺産として正確な城下の絵図を残した。これは、將軍の命により作成し、幕府に提出するものである。前川を曲げて十日町の城下ができた、上山藩の城下の基本を作った。

島津) 土岐家は大変な名族であり、最後に、沢庵と土岐のかかわりをどう今に活かすかという観点で、自分なりにどういう夢をもっているのか話してもらいたい。これは、羽州街道で共有できることである。

木村) 羽州街道の復活を夢見ている。平成7年に歴史国道の指定を受け、江戸時代の姿に復元する夢が語られた時があった。当時、北海道、東北の中で1か所選定された。国交省、農水省、文化庁も入った横断的なもので私も非常に期待をした。国や県の機関も入った会議も重ねられたが、今は歴史国道の言葉すら出てこない。羽州街道は、13藩が通った、大雪の場合は上杉公も通った由緒ある街道であり、何とか整備したい。

鈴木) 春雨庵は、県の指定文化財に史跡になっているが、市内にある沢庵の書簡や遺品が一点も文化財の指定を受けていない。今この室内に展示してある、沢庵が土岐頼行に宛てた、東海寺から出したお礼の書簡。上山ではお世話になった、家光が毎日のように訪ねてくるなどが書いてある。また、この書簡の脇にもうひとつの掛け軸もある。これには沢庵がナーバスになっている様子も書いてある。これには極め札が付いており真筆だと思うが、これから上山のまちづくりに活かしていくなら真贋の鑑定が必要だと思う。これは現実的で可能な夢だと思うが、やっていけねばならないことだと思っている。

三春) 沢庵の処世の心得がかなり残っている。これを大人用、子ども用に分類して広めていきたい。「この世に客に来たと思え」、「腹が立ったら空を仰いで雲を見ろ」、など子供に読ませたいもの処世訓がかなりある。人物主義の中で沢庵を取り上げてほしい。沢庵は、いろいろな経本を書いて売って油代にしていた。

正木) 鈴木さんは、「したたかな政治坊主」との評したが、臨濟僧にはよくあること。同時に築庭、作庭の名人であった。化け物である。戦乱の時代に権力者全員から尊敬されることは考えられない。敵を作らない処世のうまさがある。一筋縄ではいかない時は、裏表がはっきりしていない方がいいのかもしれない。

玄侑宗久から語録を選んで本にしてもらうこともいいかもしれない。今は、短い言葉で読みやすい本が好まれる時代。

室町の後半には、土岐家も貴族化した。江戸幕府からすると土岐家は利用価値があった。両

方が得をする。その間を取り持つという意味では、沢庵は巧であった。戦国時代には坊さんが仲を取り持つことがよくあった。かつては政治家の上に禅僧がいた。8代将軍以降は、宗教との関わりはなくなった。政治と関わった最後の僧かもしれない。

今私も、あちこちから宗教の立て直しを頼まれているが、一般の人にポイントはどうアピールするかである。メディアにどう取り上げてもらうかが重要である。

幕府にとっては、沢庵を3年で戻した意味はあった。流しっぱなしにしなかった。戻ってから後世に名を遺したのは沢庵のみである。